様式第１号（第１０条関係）

2024 年度業務実績報告書

提出日 2025 年 1 月 17 日

１．職名・氏名　准教授・林潤

２．学位　博士　、専門分野　理学　、授与機関　総合研究大学院大学　、授与年月　1999 年 3 月

３．教育活動

(1)講義・演習・実験・実習

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
１年生　導入ゼミ（1 単位 前期 15 回担当）

②内容・ねらい
レポートの初歩的な書き方、文章表現の仕方を学ばせる。
パワーポイントでの発表、スライド作成、セリフ文章作成など表現技法を学ばせる。
科学的な考え方を学ばせる。
初歩的な科学英語の文章を学ばせる。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫
導入ゼミなので、なるべく初歩的なことから基礎知識を習得させるように気をつけている。
また、なるべく知識の羅列ではなく、時事的な事柄、最新のトピックスを盛り込み興味を持ちやすい講義になるように努力している。
プレゼンテーションを実際行い、資料の作成の仕方や口頭発表のやり方を実地で訓練する。

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
３年生　植物生理学 II（旧園芸植物資源学）（2 単位　前期 15 回担当）

② 内容・ねらい
植物生理学Ｉの継続としてエネルギー代謝、同化と異化、を担当する。
植物生理学Ｉで学んだことをふまえ、植物の生理に関してさらに詳細な知見を学ぶ。高等植物のエネルギー・物質代謝についての統一的な知識を学ぶことで、分子レベルでの学習の基礎を築く。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫
基本的に学生は予習復習しないので、復習を兼ねて最初の前半 20 分を資料参照可での前回授業内容の小テストを最初に行い、解答説明を兼ねた講義を 20 分している。後半 50 分で次の講義を行っている。
期末テストのみにすると学生が講義内容を全て把握しきれなくなってきたので、中間テストを行いテスト範囲を分割して学びやすくしている。
中間・期末テストは小テストから出題することをアナウンスしているので小テストの解説は比較的まじめに聞いている学生が多い。

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
１年生　化学実験　（分担）（1 単位 通年 15 回）7 回担当
分担者：日芔教授、片野教授、伊藤教授、植松准教授、黒川准教授

②内容・ねらい
大学での実験の心構え、基本的な実験マナー、レポート作成を教育する。
基本的な実験器具の操作を理解させる。

自分たちで出したデータを基にした計算問題を出題して自分の頭で考えさせる。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫
高校の教科書で学んだことを実際に体験できる内容とした。学生レポートの感想から概ね目的通りに授業ができていると思われる。

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
3 年生　分子生物学実験（分担）（1 単位　通年）2.5 回担当
分担者：石川教授、篠崎准教授

②内容・ねらい
分子生物学分野における各種の“基本的な”実験技術の習得

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫
分子生物学Ｉの講義内容になるべく沿った内容で演習を行い、講義と並行して座学の知識を実験で実感させる。

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
3 年生　分子生物学演習（分担）（1 単位　通年）2.5 回担当
分担者：石川教授、篠崎准教授

②内容・ねらい
分子生物学実験における試薬、実験方法に関する知識を学ぶ。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫
実験プロトコル章末に設問を入れ、実験原理等の理解の一助にしている。設問は実験終了後に解答させて討議の場を作り、わからないままで終わらずに設問が理解できるように工夫している。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
2 年生　生物資源学概論（分担）（1 単位　通年）1 回担当
分担者：生物資源学科教員

②内容・ねらい
植物生理学の社会的・農学的応用について講義。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫
基礎学問である植物生理学がどのように実際に役立っているかを平易に説明する。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
4 年生　専攻演習（2 単位　通年）

②内容・ねらい
国内外の英文論文を熟読理解させて専門分野における研究の方向性、最新の知識を学ばせる。
学術論文の読み方、データの捕らえ方を学ばせる。科学的な考え方を学ばせる。
プレゼンテーションと質疑により知識として得たものをいかにして平易に発表するか、といった表現技法を学ばせる。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫
学生には学術論文のレジュメとパワーポイントを用意させる。
論文の図表の解釈がどのように書いてあるかを曖昧にせず説明させる。
理解していない場合は次の授業にやり直して 1 つの論文をきちんと理解させる。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
4年生　卒業論文（6単位　通年）

②内容・ねらい
植物分子細胞生物学分野の研究を行い、その基礎的な知識実験を通して他人から教えてもらい、自分が実行するときにどういったことが必要になるかを実地に教授する。
これは、学生が就職後、初めに直面する非常に大事なことなので、重要視している。何度も行い聞かせやってみせて根気強く指導する。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫
日頃から、学生とデータのやり取りを常に行いディスカッションする。
実験方法の細かな注意点や実験機器類の操作上の注意点などをすぐに話し合えるようにしている。

４．研究業績

(1)研究業績の公表　年ベース 2024R6 年 1 月-12 月
①著書 【0 本】
②学術論文（査読あり） 【0 本】
③その他論文（査読なし） 【0 本】
④学会発表等 ＊1. メタカスパーゼ抑制体の葉での暗所誘導老化 日本植物学会　第 88 回大会（2024 年 9 月） **泉田圭亮、大場友葵、川南有希奈、**<u>林潤</u> 【　1 件】
⑤その他の公表実績 【　本】
(2)科研費等の競争的資金獲得実績　2024R6 年 4 月-2025R7 年 3 月
(3)特許等取得　年ベース 2024R6 年 1 月-12 月
(4)学会活動等　年ベース 2024R6 年 1 月-12 月
植物生理学会　第 66 回年会プログラム委員

５．地域・社会貢献活動

公開講座「植物での CO2 の取り込みと放出について①-③」、ZOOM 講義、7 月 17 日、18 日、19 日、20－21 時

６．大学運営への参画

(1)補職
(2)委員会・チーム活動
学部設備更新・保守点検委員会、遺伝子組換え実験安全委員会
(3)学内行事への参加
オープンキャンパス（あわらキャンパス)、学生サークル顧問：オカルトサークル、県高校教員懇話会
(4)その他、自発的活動など
施設管理：生物資源学部棟 501、505、508、215、213 実験準備室の管理運営